

学位論文要旨

学位論文題目 日本語とベトナム語における複合動詞の対照研究

申請者氏名 DO THI XUAN THU

膠着語である日本語と孤立語であるベトナム語の言語類型的特徴は極めて異なっている。とりわけ顕著なのは、日本語とベトナム語の動詞と動詞が結合した複合動詞である。そのため、両言語を対照することによって、両言語の複合動詞の詳しい異同が理解できるようになることが期待できる。

現在まで、日本語とベトナム語の複合動詞を対照した研究は、ベトナム語では Tran Thi Chung Toan (2002)の『日本語の複合動詞—ベトナム語に対応する表現—』のみである。しかし、この研究では、単純に日本語の複合動詞はベトナム語でどのような単語、あるいは句に置き換えられるかしか示していない。日本語の複合動詞はどのような規則に基づいて、構成されているかを考察した上でベトナム語と体系的に対照した研究は存在しない。つまり、Tran Thi Chung Toan (2002)の研究は、個別の語彙対応の羅列にとどまっている。両言語の複合動詞の異同に関しては明らかにしていない。

日本語では、働きかけと同時に状態/位置変化の結果も含意する単純動詞「壊す」、「落とす」などをベトナム語では複合動詞で「“đánh vỡ” (叩く壊れる)」、「“đánh rơi” (叩く落ちる)」と表す。このように日本語で、1語で表す言葉をベトナム語では2語で表さなければならない。一方、「叩き壊す」、「叩き落とす」などのような日本語の複合動詞はベトナム語の複合動詞には「叩き壊す—*đánh đánh vỡ」「叩き落とす—*đánh đánh rơi」が存在しない。対象研究の立場から、日本語とベトナム語における複合動詞の構造について相違点と類似点を見た。

日本語の複合動詞が語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2つに分類される。語彙的複合動詞は、後項動詞が助動詞的な役割を持たないのに対し、統語的複合動詞の後項動詞は、アスペクト等の助動詞的な機能を持っている。しかし、ベトナム語の複合動詞には日本語の語彙的複合動詞に対応するものしかない。日本語の統語的複合動詞のアスペクトなどの助動詞に相当するものは、ベトナム語では機能詞である。更に、日本語の語彙的複合動詞には並立関係、付帯状況、手段結果、原因結果、補文関係が存在する。それに対して、ベトナム語の語彙的複合動詞は手段結果、並立関係しか存在しない。

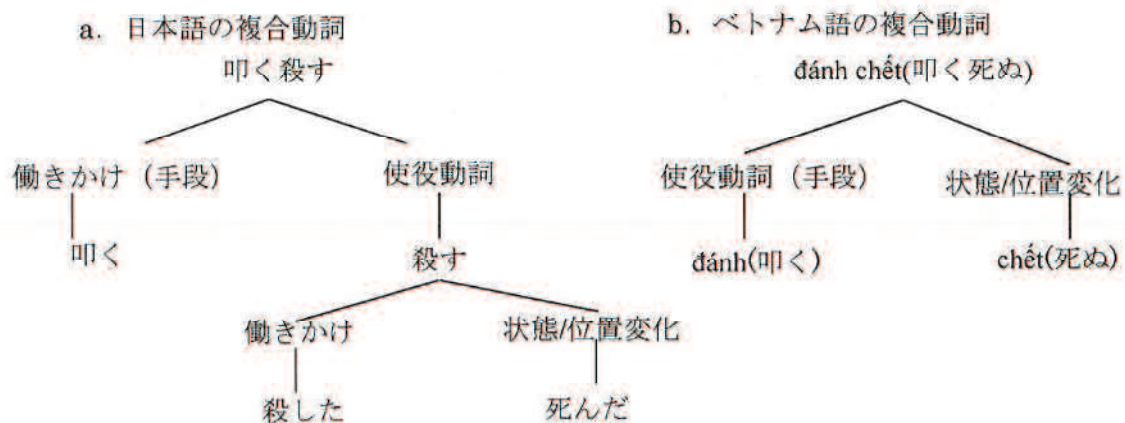
日本語の語彙的複合動詞では構成素が他動性に関しては同一のものしか組み合わせられない「他動性調和の原則」がある。例えば、他動詞と他動詞「押し開ける、聞き直す」、非能格自動詞と非能格自動詞「歩き回る、動き回る」、非対格自動詞と非対格自動詞「こぼれ落ちる、崩れ落ちる」、非能格自動詞と他動詞「座り直す、出直す」、他動詞と非能格自動詞「探し回る、買い回る」という組み合わせになることである。つまり、日本語の語彙的複合動詞は「他動性調和の原則」の制限に従い、他動詞と非対格自動詞を結合することは許

されない。それに対して、「đánh chết」*(叩き死ぬ)、「phá vỡ」*(打ち壊れる)などのベトナム語の複合動詞は「他動性調和の原則」に当てはまらず、構成構造は「他動詞+自動詞」となる。

その理由は、日本語の使役動詞は使役を表す要素は顕在的に表し、動作と同時に結果も含意する。従って、前項動詞の手段を表す働きかけ他動詞と結合すると、他動詞/非能格動詞同士の組み合わせとなり、「他動性調和の原則」制限に従う。

それに対して、ベトナム語の使役動詞は使役を表す要素は潜在的に表示し、使役動詞は動作のみを表し、完了アスペクトを含意しない。従って、結果を表したい場合は、状態/位置変化を表す結果の自動詞と結合する。ベトナム語の前項動詞の使役を潜在的に表示する使役動詞と後項動詞の状態/位置変化を表す結果の自動詞を結合すると、日本語の使役動詞に対応する。そのため、ベトナム語の複合動詞は「他動性調和の原則」に当てはまらないのである。日本語とベトナム語の複合動詞の構成素の異なりは以下の表のようになる。

日本語とベトナム語の複合動詞の構成構造



表のように、日本語とベトナム語における複合動詞は、言語類型的に異なっている。日本語の複合動詞は複数の述語を1つの動詞に合成することが出来るため、3つの述語(押し倒す)「〈手段-叩く〉+〈使役-殺した〈結果-死んだ〉」を合わせた1つの動詞となる。つまり、日本語の使役動詞においては使役を表す要素は顕在的に表示し、動作と同時に結果も含意する。更に、日本語の複合動詞は構成素が他動性に関して、同一のものしか組み合わせられないため、複合動詞は前項動詞、後項動詞共に他動詞/非能格動詞同士の組み合わせとなる。従って、影山(1993)の「他動性調和の原則」と松本(1998)の「主語一致の原則」の制限に従う。

一方、ベトナム語は複数の述語を複数の位置に代入する。そのため、ベトナム語の複合動詞「đánh chết」(叩く+死ぬ=叩く死ぬ)は2つの述語が「〈手段-叩く〉+〈結果-死ぬ〉」を2つの位置に代入する。つまり、使役を表す要素は顕在的に表示し、使役動詞は動作のみ表し、完了アスペクトを含意しない。従って、結果を表したい場合は、状態/位置変

化を表す結果の自動詞と結合する。このことから、ベトナム語の手段結果複合動詞は「他動性調和の原則」に当てはまらず、構成構造は「他動詞＋自動詞」となる。更に、「叩き殺す－*đánh giết chết」のような日本語の複合動詞はベトナム語の複合動詞にすることはできない。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 13 / 号	氏 名	Do Thi Xuan Thu
論文題目	ベトナム語の複合動詞—日本語との対照を通して—		

(論文審査概要)

本論文は、ベトナム語の複合動詞について、日本語の複合動詞と対照するものである。日本語の複合動詞は、語彙的複合動詞(第1, 第2の動詞共に助動詞的ではない: 叩きつぶす)と統語的複合動詞(第2の動詞が助動詞的機能を持つ: 食べ始める)に分けられるが、ベトナム語には後者に相当するものが存在しないため、ベトナム語の複合動詞として対比されるのは、前者の語彙的複合動詞に限られる。

第1章では、日本語の複合動詞の特徴を先行研究に基づいて概観し、第2章では、ベトナム語を知らない読者を想定して、ベトナム語の概要を紹介している。

第3章からが、本論文の本題である。第3章では、ベトナム語の複合動詞に関する先行研究における分類を検討し、日本語と対照できるものとして、原因結果複合動詞と並立関係複合動詞を抽出した新たな分類を提案している。

先行研究においては、日本語の語彙的複合動詞の構成素間として、手段結果関係(押し倒す)、並立関係(恐れおののく)、様態・付帯状況関係(買い戻す)、原因結果関係(溺れ死ぬ)、補文関係(食べ残す)の5つの関係があることが指摘されているが、第4章では、まず、ベトナム語には手段結果関係と並立関係のみが存在することを指摘している。しかし、これらの関係を形成する複合動詞の構成素の性質が日本語とベトナム語では大きく異なっている。日本語の複合動詞は一般に他動性に関して一致しなければならない(他動詞+他動詞, 自動詞+自動詞)ことが知られている。従って日本語の手段結果複合動詞は第1の動詞が手段を表す場合第2の動詞は結果の成立(=目的語の状態変化)を含意する他動詞でなければならない(たたきつぶす vs. *たたきつぶれる)。これに対し、ベトナム語の手段結果複合動詞では、第1の動詞が他動詞で手段を表す場合、これと結びつく第2の動詞は結果の成立を含意する(非対格)自動詞でなければならない(*タタキツプス vs. タタキツブレル)。このことは、複合動詞を持つ言語において、日本語に見られる他動性に関する一致の制約は普遍的ではないことを示唆している。続いて同じく第4章では、並立関係複合動詞についての対照を行っている。日本語の並立複合動詞には、構成素が共に類義語であり、かつ、活動動詞であるという制約があるのに対し、ベトナム語の並立関係複合動詞は、対義語の組み合わせも可能であり、更に達成動詞の組み合わせも可であるという点で、日本語と大きく異なることが指摘されている。また、ベトナム語の並立関係複合動詞は特定の条件で、構成素間に他の要素を挿入できる点で、厳密な隣接性を守らなければならない日本語の並立関係複合動詞と異なっていることも指摘されている。

第5章は、まとめと、今後の展望である。

1. 創造性

ベトナム語を日本語の先行研究を通して見るという方法論は先行研究が殆どない。特に複合動詞に関する対照研究はその点において新規性がある。特に、本論文は、類似した意味を持つ複合動詞であっても、構成素間の関係が大きく異なっていることを指摘した点においては優れている。

2. 論理性

本論文の結論は明確かつ、重要であるが、それに至る議論の構成は冗長な部分や、説明不足の点があり、結論の明確さを十分に活かしきれているとは言い難い。しかし、大きな論理の破綻はなく、論理性については、全体として達成できている。

3. 厳格性

ベトナム語の複合動詞に関して、外部審査委員により、本論文に引用されたもの以外の論文が例示されているが、それらが、引用されていない点で、先行研究が十分に渉猟されているとは言い難い点で問題がある。また、本論文では、ベトナム語に関して、申請者自身の内省・直観によるデータ収集という方法を採用しているが、同じく外部審査員により、申請者自身がテキストから収集した用例がないことが指摘されている。しかし、内省・直観による方法は、特に、存在し得ない形式(不適格な形式)を見つけ出すことができるという利点があり、本論文においては、不適格な形式も重要であるため、特に問題がないと考えられる。よって、厳格性については全体として達成できている。

4. 発展性(選択的記述項目)

日本語やベトナム語以外にも、東南アジアからアフリカにかけて、複合動詞を含む動詞連続は広く分布している。本論文は、類似した意味を持つ複合動詞であっても、その関係は異なり得るということを示しており、上記地域の複合動詞の類型論的研究の可能性を示した点でにおいては優れている。

Large empty rectangular box for text or comments.

論文審査結果

合 · 否

審査委員

(氏名) 和田 学

(氏名) 有元 光彦

(氏名) 富平 美波

(氏名) 更科 慎一

(氏名) _____